

さて、歴史は移り、満州事変へと進むわけですが、満州事変にはこう言う背景があるのです。満州事変の前年より、シナでは排日・侮日運動がくりひろげられ、昭和五年には実に一〇人の日本人が殺害されています。上海で、四川で、山東省で、一般の日本人が殺されているのです。

昭和六年五月三十日には閩島暴動が起きます。発電所が襲撃され、電気が消える。通信が止まり、交通が破壊される。そしてそこにいた日本人・朝鮮人二人が殺されるという事件が起きます。その次には共匪（共産賊）事件が満州の方々で起こります。八十一件起こります。これによって殺された日本人は四十四人、負傷者は数限りなしです。満州事変が起きた時の満州は、張学良の軍隊は二十万人、そして一本の鉄道を守っている日本軍（関東軍）は僅か一万人、つまり満鉄は二十倍の敵に囲まれていたのです。そのうえ当時中国政府は革命外交を唱え、日本の持っている既得権益、つまり満鉄とか旅順・大連の租借権を、武力を以て回収すると声明しました。だからその下の者は、いい気になって日茶苦茶をやるのです。当時、日本人の小学生は、閩東軍の兵隊さんに守られながら学校に通ったのです。

中村繁先生は『大東亜戦争への道』で「満州事変は原因ではなく、むしろ結果であった」と言われています。このような背景を書きませんし、知識人とも言いません。満州事変と言うと、柳条溝の鉄路に爆薬を仕掛けて、それをシナ軍のせいにして攻撃したのだとばかりいう。そうではないんです。背景には、いま申ししたことが種々あったのです。排日集会在ひんぱんに開かれ、これが満州全土に拡がって、「日本の製品は買わない、焼いてしまえ。日本人を見たら石を投げろ、唾をはきかけろ。」と運動したのです。このような状況下、しかも二十倍の敵軍に包囲された中で、どうするかが閩東軍の問題だったのです。

満州事変の直接の契機となったのが中村大尉虐殺事件です。これもやはりただの殺され方ではなく、腹わたをえぐり出され、目をえぐられ、腕をもぎ取られて焼かれたといった殺され方でした。さらに万宝山事件が起きます。同胞の朝鮮人の集落が襲われ、大勢の朝鮮人が殺されます。この中村大尉虐殺事件や万宝山事件が直接のきっかけとなって、「これは何とかしなければならぬ。うかうかしていたら、二十万の張学良軍がいつ日本人を襲ってくるか分からない。」ということになったのが柳条溝事件なのです。

そのころアメリカの資本による満鉄包囲網が完成します。リットン報告書にこういうことが書いてあります。「四半世紀にわたる満州における国際戦争は、鉄道の戦いであった」と。